

峠（四二―四五年度）及び犬寄峠（四二―四五年度）などの難所を解消することに成功し、この結果交通量も大幅に増加していった。二次改築は四二年度より始まり、伊予道路（松山市藤原町―伊予市下吾川）の建設を行っていたが、五一年四月全線の供用が開始された。

伊予道路はその後、改築工事が行なわれ、五九年二月には松山市北藤原町から松前町上高柳までが四車線となった。

犬寄峠 藩政時代の犬寄峠（写真7―20）は、旧国道が通過する峠（標高三〇六m）のやや上の鞍部（標高三

二九m）を通過しており、旧国道の通る峠の部分は、明治時代の建設工事により山地を切り取って作られたものである。峠の四辻には大正十一年に建立された道標がたっており、「郡中町へ三里七丁 右中山町へ一里三十一丁 左佐礼谷役場へ二十五丁」と刻まれている。犬寄の地名は、昔この辺りに山犬が多く出没し、旅人を襲ったことに由来すると言う。松山から大洲に向かう飛脚が山犬に追われ松の木の上に逃げ登ったとか、畑野左衛門が山猫を退治したなどの伝説が今も語り伝えられている。

旧国道が建設された後、明治三八年ころより郡中―中山間を乗合馬車が開通し、内子・中山方面から郡中方面へ多くの荷馬車が銅鉱石・木材・木炭などを積んで犬寄峠を越えていった。犬寄峠周辺の本格的改築は昭和四二年より始まり、犬寄隧道（延長七四八・五m）をはじめ東峰ずい道（同一〇五m）、犬寄大橋（同一〇五m）などが建設され、昔の難所も一変した（写真7―21）。